

たぬき広島の昔ばなし

ひろしま

むかし

「大手島・小手島」編

てしま

おてしま





さぬき広島の昔ばなし
「手島・小手島」編

発行 ふれ愛の町ひろしまをつくる会

編集 島案内人実行委員会

平井光子 平井末子
三野道子 横瀬通子

協力 HOTサンタルプロジェクト
実行委員会

会長 正木かつみ

印刷 榎日柳印刷所

平成29年3月

さぬき広島の昔ばなし

ひろしま むかし

「てしま おてしま」編 「手島・小手島」編



手島



ひまわり畑



西浦海岸

- 安養寺と金輪寺
- 昔ばなし「馬の口岬」
- 手島八幡神社
- 昔ばなし「あでの浜」
- 金之丞踊りの始まり
- 学校の始まり
- 昔ばなし「おらび谷」



小手島港
静かでポエムのある港



港にある手づくりの案内板と
トーテムポール

- 五輪の塚「朝日さん」
- 源平桃
- 手づくりアート

小手島

作者紹介と絵



●「金之丞踊り」

●「あでの浜」

[絵] 高橋周平

(武蔵野美術大学 大学院 造形研究科 日本画コース卒業)



●「馬の口岬」

●「おらび谷」

[絵] 川村陽平

(武蔵野美術大学 大学院 造形研究科 日本画コース卒業)



●「学校のはじまり」

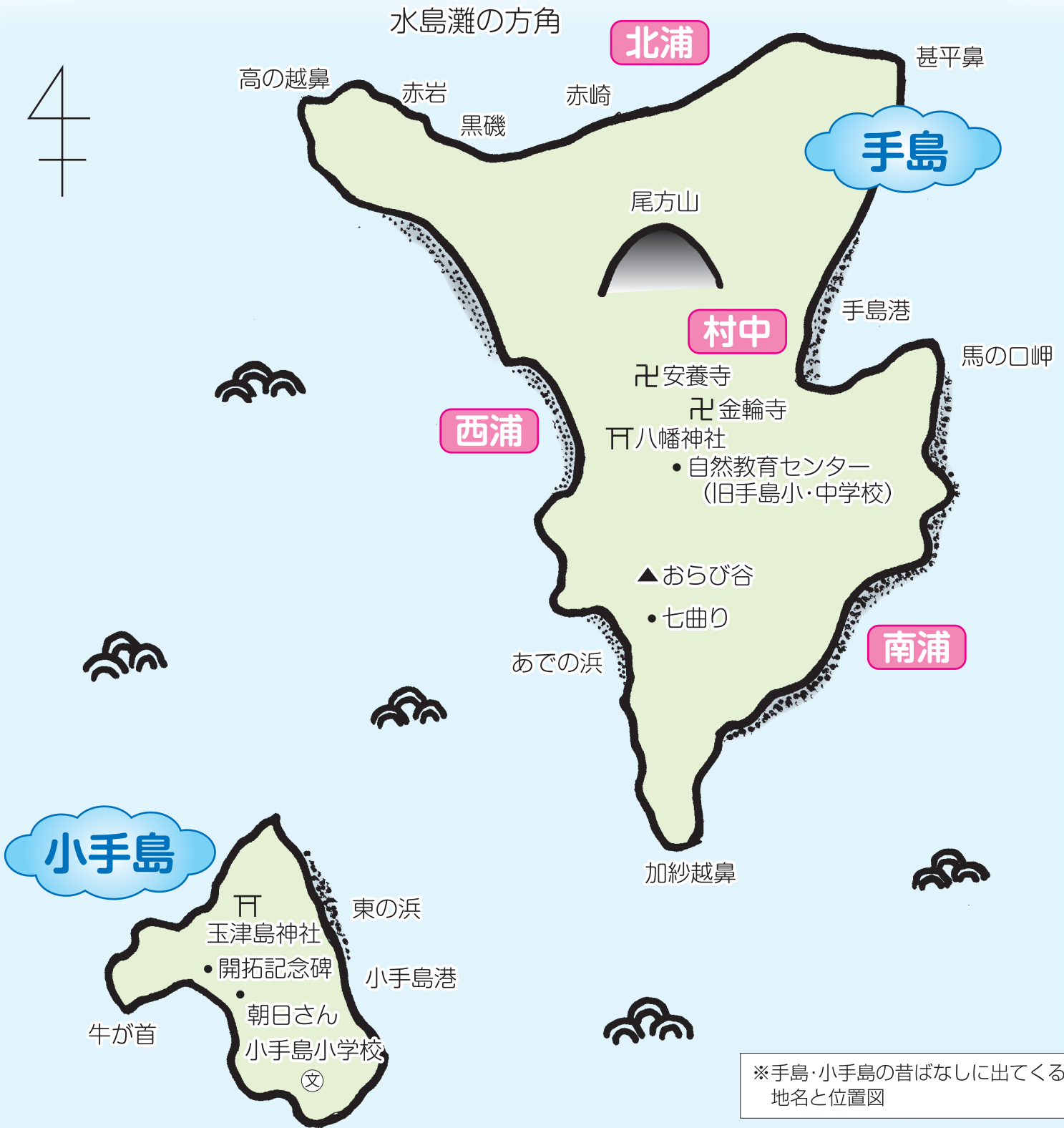
[絵] 齊藤茉莉

(武蔵野美術大学 大学院 造形研究科 日本画コース卒業)

● [表紙絵] 長谷川葉月

(多摩美術大学 絵画学科 日本画専攻 在学中)

[参照文献] 手島小学校百年のあゆみ・四国地方の民俗芸能



手島は、備讃瀬戸に浮かぶ塩飽諸島のうちの、
周囲わずか10.9 kmの島である。

全体的に山が多く、島の東部にある集落は

三方を山で囲まれており、ちょうど左手の親指（高の越鼻）

と人差し指（甚平鼻）を広げてみたような形が手に
似ているので『手島』と名づけたといわれている。

手島に初めて人が住み着いたのは定かではないが、
仏教伝来以前から住んでいたと伝えられている。

一方、小手島は手島の西寄りに位置し、文字通り

周囲3.8 kmの小さな島で手島の所有地であった。

明治維新のころ、手島や近くの島の人々が移住し、

開拓が始まった。

◎安養寺

安養寺は今も「上の寺」として親しまれており、山門を見上げながら石段を登って行くと右手に銅板葺きの鐘楼の中に立派な梵鐘がある。

ここ安養寺には本尊「木造阿弥陀如来立像」が、護摩堂には「木造毘沙門天立像」が安置されており、いずれも平安時代のもものとされている。

境内の宝塔（丸亀市文化財指定）は鎌倉時代のもものと考えられている。



安養寺 拜殿



安養寺 鐘楼



安養寺 宝塔

◎金輪寺

「下の寺」と呼ばれているのは金輪寺で、ここには本尊「木造薬師如来坐像」、脇侍には「木造持国天立像」「木造多聞天立像」が安置されており、いずれも平安時代中期の作とみられている。

また天正年間に朝鮮より持ち帰ったとされる「絹本着色仏涅槃図」の掛軸があり、三体の仏像と共に昭和六十三年に、丸亀市より文化財として指定を受け、大切に保存されている。



金輪寺（仏像保存庫）



金輪寺の木像仏（丸亀市指定文化財）

本尊は中央…木造薬師如来坐像

本尊の右側…木造持国天立像

本尊の左側…木造多聞天立像

自然豊かな手島のお寺・神社には、かつての繁栄が偲ばれる仏像や船絵馬が残っており、これらの貴重な文化財を島の人々は大切に守っています。

■安養寺にまつわる昔ばなし

「馬の口岬」

この岬の沖合いに、巨大な蛸たこが
二匹住んでおった。

上の寺と呼ばれている安養寺の



梵鐘ぼんしょうを京都から買い入れ、馬
の口岬おおだこまで帰ったときのこと。
二匹の大蛸おおだこに奪いとられたん



大蛸が遊び半分で作ったと言われている門のような蛸岩

そういう訳で安養寺には梵鐘
がなかったんじゃ。

今でも馬の口岬の沖には、大
蛸のすみかとなった二つの鐘^{かね}が
沈んでいるそう。



甚平鼻

馬の口岬

じゃと。

二度目は甚平鼻寄りに帰っ
たが、またもや大蛸に船を馬
の口まで引っ張られ、奪いと
られてしもうたとか。

◎手島八幡神社

「八幡」さんといわれ、尾方山の南西麓に位置し、応神天皇を祭神とする。

平安末期（一一八三年）水島の戦で敗れた源氏の落人二十八人がこの島に逃れた後、住みつくようになったと言われており、木曾義仲（源氏）の手により平安末期か鎌倉時代に入って建立されたという説がある。

又、一二四六年鎌倉幕府の命を受けた香西家資が備讃瀬戸の海賊を追討して島々を支配下にした時、手島に来島した家臣によって創建されたという説もある。いずれにしても八幡神社は源氏との関係が深かったと思われる。



長い階段を昇りつめると両側に大きな石灯籠がある。

◎源平合戦と落人伝説

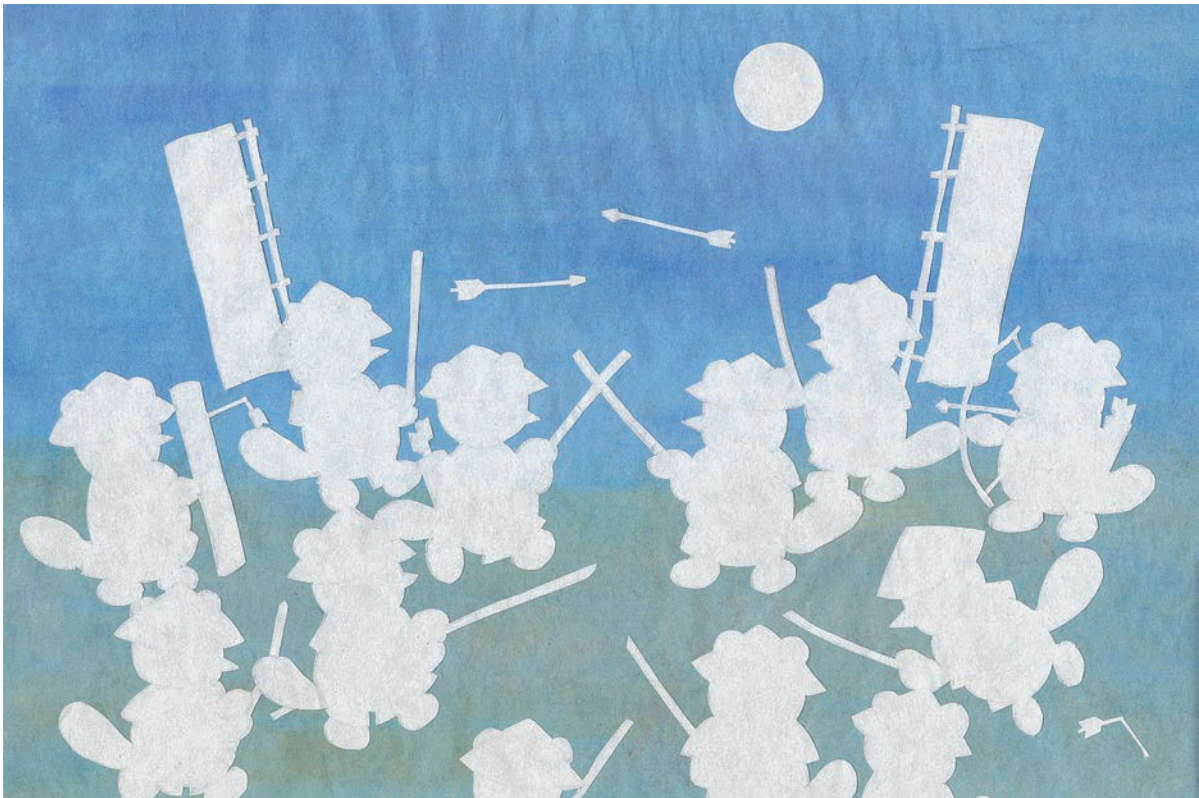
昔、源平合戦のころ、一一八三年（寿永二年）備前に攻め込んだ源氏方の木曾義仲の軍勢は平家軍の必死の反撃にあい、水島で大敗した。

戦いに敗れた源氏の落人が手島に逃れた後、住み着いた。手島に伝わる盆踊り「六法道」（ロッパイドウ）は、戦いに破れ、さまよう源氏の落人の亡霊を吊うものであるという。

水島灘に面した北浦の浜には、赤岩、赤崎、黒磯という地名がある。水島の合戦では源氏方も平家方にも多数の死傷者を出し、高梁川河口（岡山県）の流れにのって打ち上げられたことから、このような地名がついた。

一一八五年（文治元年）源氏軍は屋島・壇ノ浦の合戦で勝利し、平家は滅亡に至り源氏の世となった。

■ 源平合戦にまつわる昔ばなし



「あでの浜」

この浜では秋の十五夜（中秋の名月）、夜の更けたころどこからともなくやって来るのか、狸が大勢集まって水島灘の合戦の芝居をするそうなの。

矢音 ビュンビュン 波音 ザアザアザア

雄叫び ヤア オー

そのうえ

ドドーン ドドドーン

カンカン カカカーン

太鼓や鐘の鳴り物入りで

それはそれは実戦さながらのすごい大芝居だったそうなの。

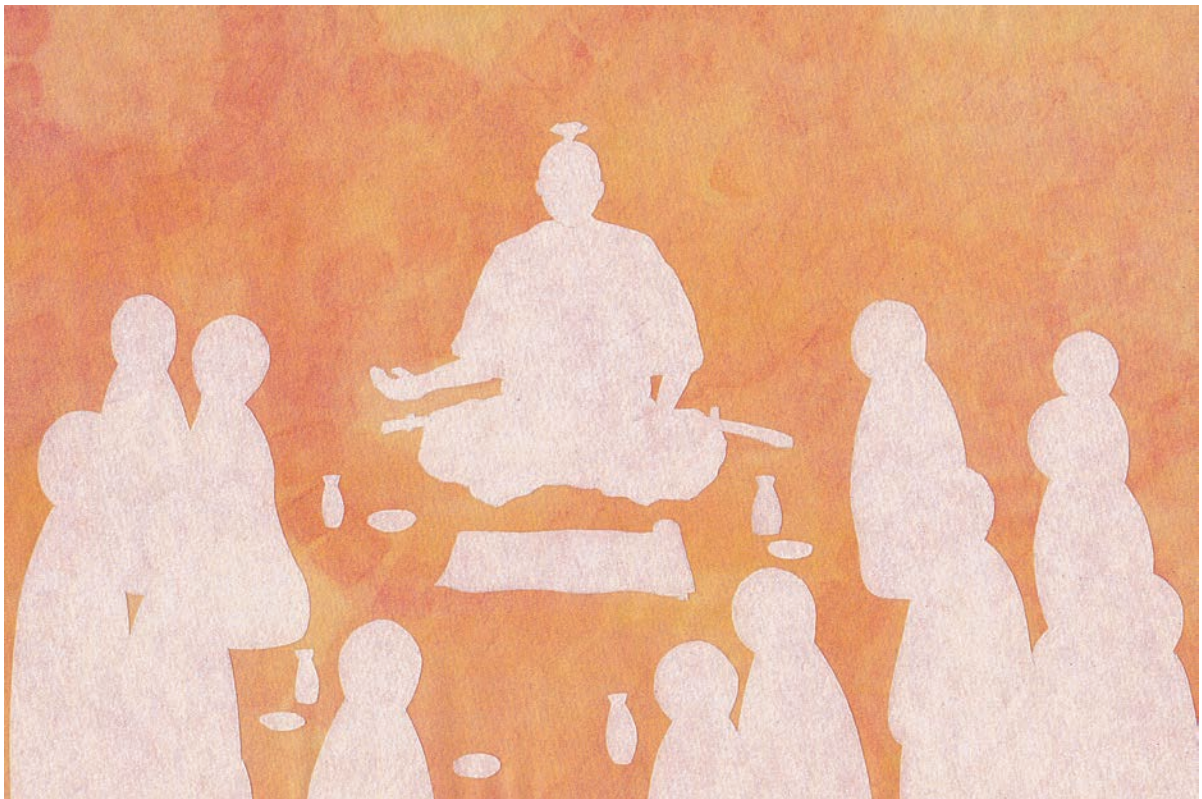
あたりが白んで来るころ、あでの浜では何ごとともなかつたかのように静まりかえり、ただ 波が打ち寄せるばかりだったと。

◎金之丞踊りの始まり

慶長五年（一六〇〇年）関ヶ原の合戦時、岡山城主宇喜多秀家は西軍に加担して敗北。徳川の軍勢に追い詰められた宇喜多の軍勢は四散し、このとき金之丞という若武者が手島に逃亡して来た。島の人達に助けられ、親しまれていたが、戦いで負傷したことで、若くしてこの世を去った。

島民はこの金之丞を追慕し、うら盆の夜、灯籠を背負い踊ったのが起源らしい。残念なことに現在、金之丞踊りを知ってる方が皆無に等しく、―受け継ぐ方法もなく―数年前までは島外よりボランティアの方々が盆踊りを盛り上げてきたが…。

貴重な文化遺産として昭和三十五年に丸亀市より無形文化財の指定を受けたことがあったが、復活保存がのぞまれている。



金之丞踊り

手島ヨシ 金之丞ヤーレーノー

ウオーヤーレー イエ

七夜もヨーナー コラ

通う ウオー タヨー

幾夜 泊めても ヤレ エー

泊め ホイ ホイ ホイ

ホイ ホイ ホイノ ホイ あかぬ

「カチッ ドンドン。カチッ ドンドン」と単調でのんびりした太鼓の音に合わせて、悠長な旋律の唄が流れる。

太鼓櫓を二重三重にとりまき、太鼓と唄に合わせて全員女装姿で、スゲ笠、あねさまかぶりに長じゅばん、太鼓帯にぞうりばきの踊り手の輪は、ゆるやかに櫓をめぐる。



◎学校の始まり

今から一五〇年近く前の明治五年、手島では寺小屋的な教育が始まった。

一方、小手島には一〇〇年位前まで教育の場がなかった。大正三年、まだ通信手段も、もちろん定期船もない時代…。手島への舟通学が始まった。

小手島の東の浜で火を焚き「今から行くよ」と合図。

手漕ぎ舟で手島の西浦あでの浜に向かってエッチラ オッチラと。

わらぞうりを履いた子どもたちは、畑や手島池を通り抜け、学校へかけて行った。

帰る時も、浜で火を焚き、合図。迎えの舟に来てもらった。

こうして二つの島の子ども達は、共にのどかな自然に見守られ、みんな仲良く学び遊んだ。

こんなこともあったらしい。浜辺付近で草焼きをすると「なんだ、なんだ」の大騒ぎ。

合図なのか何なのかと迷ってしまい、草焼きをした人は大目玉を食らった。

この舟通学は昭和初期頃まで続いたそうだ。「のろし」や「おらぶ(叫ぶ)」ことで連絡をとり合うなんてなんと悠長な時代だったことだろう。

学校の経緯

一八七二年(明治五年)

民家や寺院で子弟の寺子屋的な教育が始まる

一八八九年(明治二十二年)

芝居小屋を借り、手島簡易小学校を設立

一八九七年(明治三〇年)

手島尋常小学校開校

一九〇三年(明治三十六年)

安養寺、金輪寺の土地を借り手島に初めて校舎が建築される

一九一四年(大正三年)

手島尋常小学校に小手島分教場を開設する

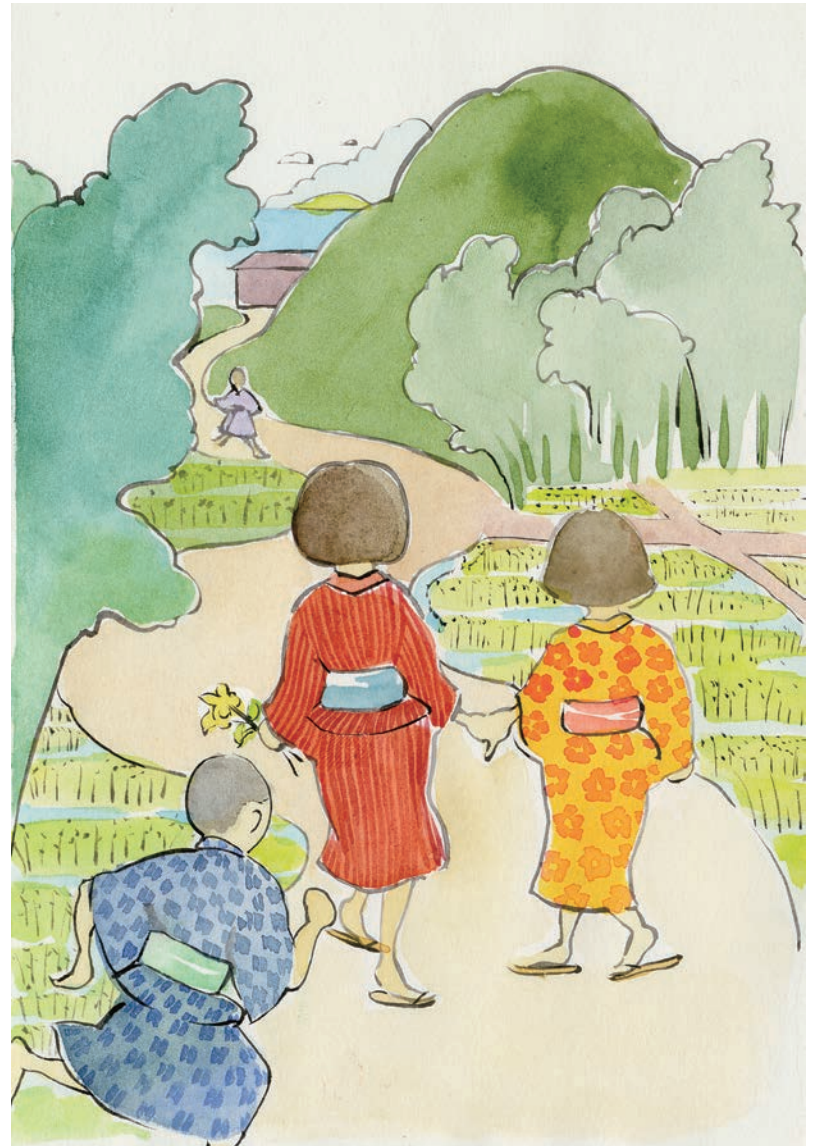
小手島の子ども達は手島小学校へ渡し舟で通学する

一九四二年(昭和十七年)

手島国民学校より、小手島分教場を分離する。そのち小手島小学校となる

現在、手島の小学校は手島自然教育センターに変わり、島外より大勢の利用客で賑わっている。

小手島小学校では、女子児童一名が在籍し、地域の方の応援を得て、学校生活を楽しんでる。



絵の中の男子二人は、小手島の
明治生まれの^{いさむ}勇^{きのえ}さんと甲さん。
手島の長町正之氏(96才)から
当時の話を聞くことができた。

■あでの浜・東の浜にまつわる昔ばなし

「おらび谷」

昔、手島から小手島への連絡は、あでの浜で狼煙のろしを上げるか、七曲ななまがり坂の上でおらぶ（叫ぶ）ことしかできなかつた。

手島には、「山通し」と呼ばれ、山をも突き抜くほどの大声の持ち主がおった。

一方、小手島には「舟がえし」と呼ばれ、舟をもひっくり返すという大声の持ち主がおった。

ある日のこと、その二人が海を隔てて延々とおらび合ったために「あでの浜」の松はみんな枯れてしまったそうなの。

手島のあでの浜と小手島の東の浜あたりは、海を隔てて、目と鼻の先。風向きによっては大声で話すと、お互いの声が届くそうなの。



◎五輪の塚「朝日さん」

その昔、小手島は周囲3.8kmの小さな無人島で、豊臣秀吉の時代に人名株（六十六株）を与えられた手島の所有地であった。

明治維新になって手島や近隣の島より移住者が来て開拓が始まった。一時は農業の他、牛を放牧していたこともあった。

その開拓時代、地面に転がったり、土の中に埋もれていた大小の石を発見し、平家の落人の墓として祀ったと伝えられてきた。以来「朝日さん」と呼ばれ、島民に親しまれている。しかし、調べてみれば、

この落人伝説は謎に包まれていた。

謎その一

「朝日さん」の石は五輪としては不揃いで風化が進んだ墓石は小手島産ではないらしい？

私が青年の頃「あれはどうも小手島の石ではないらしい」と言っていた父（大正元年生）の言葉が引っかかっていた。

以前、丸亀市文化財保護審議会の遠藤亮会長が調査に訪れた時のことを思い出し、資料を送って頂いた。それによると、この石は凝灰石で石造物を加工し易いが、風化の進行が早く、弥谷山から雨霧山にかけて産出されている：ということであった。

*七十一番札所弥谷寺は凝灰岩類の採石跡を利用して建立され、洞窟や岸壁に刻まれた磨崖仏がある。

*弥谷信仰：今もって弥谷寺参拝は盛んである。



小手島から望む朝日
むこうに讃岐富士が見える



平家の落人の墓といわれる朝日さん

謎その二

どうして遠方よりわざわざ小手島にどのようなようにして石材を運んできたのか？

石の大きさから平家の公達の墓なのか？

*平家軍は水島の戦いで勝利したものの屋島の合戦で敗れ、一一八五年壇ノ浦合戦で大敗し、平家は滅亡した。追っ手を逃れる落人達が無人島であった小手島に辿り着き、隠れ住んだのだろうか？

瀬戸内海の島々では源平合戦の落人伝説があちこちで残されているが、小手島にある石は、誰の為にどこからどのようにして運ばれてきたのか？手がかりは掴めないまま謎は深まるばかりなり。



榎の大木に見守られている開拓記念碑

謎その三

平家の墓はなぜ「朝日さん」と呼ばれているのか？

朝日が昇る方角に向けて祀ったので「朝日さん」と呼ぶようになったと推測する。実際、五輪の塚に立つと晴れた日には海の向こうに讃岐富士から昇る美しい朝日を見ることが出来る。

「朝日さん」の近くに「開拓記念碑」があり、神渡常造の名前が刻まれている。いつ建立されたのか定かではない。開拓者の苦労は計りしれないが、この地に眠る落人の霊を弔い、小手島での子孫繁栄を願っていたのではないだろうか？

謎多き「朝日さん」の伝説は歴史のロマンであり、語り継ぎたい、ふるさとの話である。

— 岡田薫夫氏 —

◎源平桃



3月末から4月10日頃までが見頃



島民が少しずつ増やしている

一本の木から紅白の花をつける、小手島の源平桃（ハナモモ）のルーツは半世紀以上前のこと、自治会長岡田薫夫しげおさんの両親と親戚の方が佐柳島（多度津）の大天狗神社に参拝した折にもらった苗木を自宅の庭に植えたことからだった。

その苗木は大木となり、岡田さんは十数年前から種を取り、大切に育てて自宅周辺に植え始めた。他の島民達にも苗木を分けてあげてうちに、源平桃の並木が広がっていった。

通学路の斜面に植えられている数本の若木は、今年四年生になる女子児童が生まれた年に植樹されたそう、傍らには手づくりアートの作品が立てられている。

三月下旬から四月上旬にかけて、周囲3.8キロ、住民三十名程の小手島は源平桃が咲き誇り、まさに「瀬戸に浮かぶ桃源郷」であり、近年は島外より訪れる人が増えている。

◎ 「手づくりアート」

小手島港に降り立つと、手作りの案内板とトーテムポール、それに誰かに似ていそうなブイ人形たちが出て迎えてくれる。かつて小手島は漁業が盛んであったが、丸亀市内に拠点を移した人が多くなり、その結果、島の人口は減少。これをきっかけに十年くらい前より活性化を図ろうと自治会長が呼びかけ、島民による「手づくりアート」の活動が始まった。

今では、港から山の上の小学校までの生活道路のあちこちに島民の作ったアートが点在している。

それぞれの場所で、それぞれの表情をした、かかし、ブイ人形、廃材利用のオブジェ……。竹で組んだ額縁から見える景色は、一枚の絵のようだ。どれもアイデアとユーモアあふれる作品で、見る人の心をなごませてくれる。



漁の解禁を待つタコつぼ



最盛期のイカナゴ

あちこちに島民がつくった楽しいアート



名前の頭文字「あ」をデザインしたアートを制作中の岡田自治会長と今中さん姉妹



これはトリックアート





さぬき広島の昔ばなし「手島・小手島」編 刊行にあたって



平成26年度に刊行された「さぬき広島昔ばなし」の続編として、28年度では「手島・小手島の昔ばなし」を作成することになりました。

昨秋、手島で聞き取り調査を行いました。

島の人口はわずか30人ほどであり、その大半が高齢者という現実を目のあたりにして歴史的貴重な文化財と共に、今何かの形で残し、昔ばなしを伝承していかなければ、埋もれてしまうのではと感じました。

手島では多くの伝説が残されていますが、今回は島の人々が大切に守って来た文化遺産に纏わる伝説や金之丞踊りを取り上げることにしました。

一方、小手島は昔、手島や近隣の島々から開拓の為に移住してきたのが始まりだと云われています。そのため歴史が浅く、伝承されている話も少ない為、現在取り組んでいる「源平桃の島」「手作りアートの島」など確実に後世に繋がっていく地域活動の様子を紹介することにしました。

この冊子をご覧下さった皆様が「自然に恵まれ、穏やかな時が流れる手島、花とアートで、優しさ溢れる小手島」を身近に感じていただければ幸いです。

聞き取り調査に参加してくださった方々や、挿絵を寄せていただいた「HOTサンダルプロジェクト」に参加した美大生の方々、ご協力ありがとうございました。制作者一同、心よりお礼申し上げます。なお、表現内容に不十分な点がありますが、ご容赦ください。

聞き取り関係者

手島 (長町正之氏、藤原當正氏、高田正明・美知子氏、濱本満男・道子氏、吉田文二氏、合田キクエ氏)
小手島 (岡田薫夫氏、富田良一氏、今中多美氏、河田テル子氏)

== HOTサンダルプロジェクト ==

未来のアーティスト支援事業として2012年(平成24年)よりスタート。

瀬戸内海の離島に学生たち(武蔵野美大、多摩美大、女子美大)が夏期の1ヶ月間滞在し、島民との交流(ワークショップ・作品発表会)を図りながら美術作品の制作活動を行うアートプロジェクト。

HOT= H(本島、広島)、O(小手島)、T(手島)
サンダル=海、砂浜をイメージ

